



TITLE:

<書評> 錢大群著 『唐律疏義新注』

AUTHOR(S):

周, 東平; 山口, 亮子

CITATION:

周, 東平 ...[et al]. <書評> 錢大群著 『唐律疏義新注』 . 東洋史研究 2010, 69(3): 391-395

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/180046>

RIGHT:

錢大群著

唐律疏義新注

周 東 平
(翻譯・山口 亮子)

現代的な意味での唐律の體系的な研究は、仁井田陞、戴炎輝ら諸先生が最も早く着手し、新たな成果が次々と豊富に得られ、その學問的恩恵は極めて大きい。『唐律疏議』は最古でありかつ最も完全に残っている法典であるために、代々これに校勘や注釋を施してきた人間は少なくない。すでに出版された現代の學者の注釋のうち、記念碑的意義を持つものに以下のようなものがある。

一、八〇年代以前は日本の學者の譯注が最もレベルが高かった。つとに滋賀秀三が『名例律』第一―三六條に日本語譯・注釋を施し、關連のある問題を明らかにした。後に瀧川政次郎を長とする律令研究會によって、日本と臺灣の中國法制史研究者數十名が集められて、『譯注日本律令』にとりくんだ。そこでなされた唐律の譯注は、滋賀秀三の研究手法取り入れているが、譯文は書き下し文に改められている。體例として律文の字句に對して極めて丁寧に注釋が施されているのみならず、各條文に解説を附し、場合によっては附説を附している。この『譯注』は引用する資料が豊

富で、律文の解釋が正確であるほか、現代の法學理論を譯注にうまくとりいれて、唐律を解釋している點が重要な特徴である。

二、劉俊文氏を代表とする九〇年代の譯注。劉氏が早くも一九八三年に校點した『唐律疏議』は些細な缺點はあるものの、現在に至るまで依然として中國大陸での通行本だ。彼は『敦煌吐魯番法制文書考釋』に續いて九〇年代半ばに『唐律疏議箋解上・下』（以下『箋解』と呼ぶ）を出版した。本書の『箋解』は疏の文のために作られており、「解析」は條文を單位として律の意味を分析し、場合によっては淵源を研究して正し、變遷を敘述し判例を補充している。これは現時點では、現代中國語による『唐律疏議』の比較的優れた注釋書といってもよい。この箋解の長所は巧みに制度の淵源を參考しており、敦煌・トウルファン文書の研究成果を取り入れることにも配慮している。しかし現代の法學理論を使って細かに調査し解釋するという點では、いささか手薄になっているくらいがある。

三、錢大群氏は八〇年代から唐律の研究書と重要な論文を陸續と發表し、數年前には筆者に對して唐律の新注を完成させたいという積年の願望があることを告げた。そして今、南京大學出版社から二〇〇七年に出版された『唐律疏義新注』（以下『新注』と呼び、この本を引用する場合はただページ數のみを明記する）は、錢氏がコンピュータを使用できずインターネット上の資料を直接利用できない狀況下、獨力で數年を費やしてついに完成させたもので、新世紀の最も重要な唐律注釋書と言っても過言ではなく、學界や特に一般の讀者にも大變便利なものとなるだろう。

上述の二冊やその他の関連する研究と比較して、筆者自身としてはこの『新注』を「雅俗共賞」の著作だとみなしているが、その理由は以下の通りである。

「雅」すなわち學術研究の深さという点から言うと。

まず、この『新注』は書名の採用においてかなり思案しており、新機軸を開き、著者のこの分野での長期にわたる探究の成果を反映している。そのため、これまでのいかなる類例の注釋書とも命名を異にし、『唐律疏義』とする。筆者はこの著作を拜讀したときのみならず、著者から委託された関連書名の確認作業中にも、著者のこの方面での力量を深く感じた。このたびの書名の整合を経て、『唐律疏義』の「議」・「義」・「疏」の名稱の運用上の問題は基本的に明確に整理されたと言つてよい。

次に、『新注』は著者の長年來の唐律研究の成果を取り入れており、明らかに著者自身の學術の風格を備えている。『名例律』の「十惡」の「内亂」の條の舅が外甥の喪に服す際は總麻を着るのであつて小功ではないという觀點（四二頁）⁵は、著者の二〇年前の研究成果に基づいて判斷を下したものだ。「死刑二」の條の「一罪二刑」の問題に對する分析（一六頁）も同様だ。類例の箇所は非常に多いため、ここでは一々列挙しない。また、『捕亡律』の「浮浪他所及闕賦役」の條の「繻を棄てて仕を求む」の典故に對し、著者は『漢書』終軍傳によると考證し（九四〇—九四一頁）、國學への造詣の深さを示した。比較してみると、淵源の考證が精緻なことで有名な『箋解』といえども、これに對してはかえつて不足がある。また『擅興律』の「乏軍興及不愛軍事」の條

の「隨身の七事」の問題に對する檢討（五二四頁）は、著者の嚴格な研究態度を示すものだ。

また、著者は「引述」中で唐律の規定に對し、可能な限り現代の法學の視點から分析を行った。このため『新注』は法學的な深い洞察と現代的な性質を湛えている。例えば『職制律』の「有所請求主司許與施行及監臨勢要囑請」の條の「引述」の中に以下のように指摘している。「唐律中の監臨・勢要の請託の罪を嚴格に處罰する」というこの點は、當時はもとより、今日においても極めて先進的といえるが、後代の人にとって、最も重要なことは、制度上、監臨・勢要の請託が實質的には犯罪と見なされず一種の命令・指示となつて人を絕對服從させる、といったことが生じないよう警戒したものであるという點である」（三六四頁）。また「受所監臨財物與乞取監臨財物」條の「引述」において「監臨するところのものを受くる罪は現代的な意味での汚職や收賄ではなく、一種の特殊な罪名だ」（三七一頁）と判斷している。『名例律』の「共犯罪逃亡依先獲者之自言決首從」の條の「引述」において「律の條において明らかに冤罪の補償問題に言及している」（一八七頁）と指摘し、「期親祖父母子孫概念的適用」の條で「子」と稱するは、男女同じ」の「緣坐は、女は同じからず」という注に注目し、これは總則的な規定としての意義は大きくないとした（二一五頁）⁷。こういつた指摘はいずれも著者の法學理論の豊かな素養と獨目の研究分析の境地を示している。

「俗」すなわち一般への普及という點、現代の讀者向けという點から言うと。

一、早くに世に出た『譯注』と『箋解』に比べ、『新注』の最

大の特徴は「譯文」の項目を設けたことだ。律文と疏の現代中國語への翻譯（「譯注」は日本の訓讀の體裁をとり、『箋解』はこの項目を設けていない）、加えて「引述」の解釋の提示と關連の注釋、ならびに讀解上の難點を提示していることや、版式と字體の選び方や、注釋の上で相互参照ができるよう工夫されていることをも含めて、現代の一般的讀者のために極力配慮されており、讀解上の便宜を提供しようとする心遣いがはつきり見て取れる。

二、律文の條目は傳統的な注釋方法を棄て、獨自の表示方法を採用しており、一般讀者にとつて參照の助けとなる一定の効果がある。律の十二篇の序疏、「贖銅」（一一頁）・「加役流」（五八頁）・「倍」（一五三―一五四頁）という専門用語に對する含蓄があり平易な解釋のいづれにもこの意圖がある。

三、附録の五つの「附表」は一般の讀者が唐代の特別な制度を理解するのを助け、「注釋詞語表」は専門用語を調べるのに便利だ。

もとより、私は『新注』にも改善すべき點があると感じており、ここでは忌憚なく錢氏に疑問を提示してご教授を請いたい。

唐律が「六賊」を初めて定め、明清律まで繼承されたことは周知の事實だ。かかる重要な専門用語に注釋を設けず、その法理や關係を解説しないのは不適切ではないだろうか。他と比較してみると、『箋解』は六賊を解説し、「自外の諸條」で、どうして「皆な此の六賊を約して罪と爲す」という點について、「六賊に従う」「六賊に同じ」「六賊を以て」「六賊に准ず」を擧げて解説し、

さらに例外の狀況があることを説明しており、比較的完備している。ただし、法學の觀點からすれば「譯注」が最も優れていると言える。「譯注」は第三二條の「解説」において具體的に「六賊」を説明しているだけでなく、その條以下の三つの條文が賊に關する通則的な規定だと特に指摘し、「賊」とは財物を奪取する或いは授受して犯罪を構成する時、奪取或いは授受の對象となつた財物を指稱する言葉であり、現代の刑法の賊物の意味よりも廣範なものだと解説した（ある種のお金・財物に換算できる違法行為と見なし、財物の消費・毀損が犯罪となるとき、贓罪を準用するといったように）。賊物に伴う犯罪は賊物の對應する評價額に應じて刑の輕重が決められる。各條を仔細に分析し精確であるだけではなく、法理上も高度な立場から歸納している。

法學の角度から分析すると、ある種の條文の解釋はさらに言葉要するであろう。そうすれば、古今に接點を持たせる作用を果たせる。たとえば「化外人」の問題では、仁井田陞の考證によれば唐代には既に「外國人」という呼稱が存在した。唐律の條文はなぜこれを採用せず、「化外人」という呼稱を特別に使つたのだろうか？ すなわち、化外人は國籍ではなく教化の差を基準としていたことが推測できる。そのため、化外人は當然外國人を含むが、それだけでなく賦税・禮法の制度上、相當特殊な羈縻府州の内附異民族を含む可能性があり、化外人とは化内人に對應して言われる呼稱であつた。特に「引述」では、「化外人相犯之法律適用」の條が、現代刑法の範疇において影響する二つの異なる面（つまり「どの地域で」・「どのような人が」）での屬人・屬地主義原則の内容に相當している、ということをはつきりさせていな

い。このことは手落ちと言わざるを得ない。また、道士・女冠・僧尼が天尊や佛像を盗んで破壊する或いは姦通する、監臨主守が監臨内で窃盜・姦通する、こういったことに重刑が科される理由を明らかにすべきであろう。それは不真正身分犯（加減身分）に屬するという性質にあるのだ。

また、流刑の配流距離はどこから計算を始めればよいのか？現代の讀者に供するからには唐代の一里がいったいどれくらいい長さかはつきり注記する必要があるのではないか？

籍没と没官は刑罰の一種としてどのような性質なのか（これは主刑・從刑・その他なのか、あるいはただ連座の刑罰であるにとどまるのか、のいずれか）？なぜなら現代の刑罰體系には、これに相當するものがないのだから。移郷は保安處分か附加刑か？「坐贓」罪の犯罪主體はただ「監臨主司の地位にない官吏」のみに限るのか？十惡はなぜ十罪あるいは重罪十條と呼ばないのか？ここである「惡」とはどう解すべきか？こういった問題はいずれも深く探求する必要がある。

總括すると、この『新注』は唐律研究が既に國際化している状況下での著者の獨自の思考の開陳であり、その學術の風格を提示したものである。もし日本人學者の關連する研究成果を十分に利用できれば、更に優れたものとなつただろう。ただし、これは著者に對する厳しすぎる要求というものだ。いずれにせよ、この書が新世紀初頭の最も重要で特徴的な唐律注釋書であることは間違いない。

註

- (1) 滋賀秀三「譯注唐律疏議」一、五、『國家學會雜誌』七二卷一〇號、七三卷三號、七四卷三・四號、七五卷一・二號、七八卷一・二號、一九五八—一九六四年。
- (2) 『譯注日本律令五・八・唐律疏議譯注篇一・四』（以下「譯注」と呼ぶ）、東京堂出版社、一九七九年、一九八四年、一九八七年、一九九六年版。このうち滋賀秀三の執筆した「唐律疏議譯注篇一（名例律）」が最も優れており、秀作といえる。
- (3) 興味深いことには、錢大群氏はこの版を底本として作業しているものの、劉氏は中華書局の一九八六年の重版本を『唐律疏議箋解』の底本としている。初版本と重版本の間には訂正があるのかどうか、筆者はまだ照合していない。
- (4) 上記の劉氏の三つの書はそれぞれ中華書局から一九八三年、一九八九年、一九九六年に出版。
- (5) 錢大群「談『唐律疏議』三條律疏的修改問題」、『南京大學學報』、一九八九年第五期。
- (6) 一九九六年出版の『唐律疏議譯註篇四』（二三四頁、戴東雄撰）はすでに『漢書』終軍傳を引用している。しかし錢氏は日本語ができず、かつこの本もなかったため、知ることができなかったようである。
- (7) ただし、律文で「稱『子』者、男女同」とあるのは例外があるのではないだろうか。例えば第一五七條「諸養子、所養父母無子而捨去者」（四〇二頁、第一八九條の七出（妻と離縁する七つの場合）の「無子」（四五三—四五四

頁)。これらは女兒を含むべきではなく、關連の譯文中で著者は子は男兒だと明らかに解釋しているけれども、これに説明を加えるべきだろう。

(8) この種の手法に對して筆者は意見を保留する。數百年間繼承されてきた條文表記法は必ずしも合理的ではないが、すでに學界に受け入れられ、共通認識となっている。このような狀況下獨力でこれまでのものを覆し一からやり直し新たな表記法を編み出す、新機軸を打ち出そうという勇氣はもちろん賞賛すべきだ。しかし適切かどうかは考慮の餘地がある。中華人民共和國の一九九七年刑法典の制定を例

に取ってみる。もし學者たちに自分で制定させたならば、それぞれが提案する罪名の目録はおそらくどれも異なっていただろう。最高人民法院と最高人民檢察院がある種の罪名の制定で同じでない部分があつたという甚だしい例もある。現在の法の概括の共通認識の達成さえ難しい狀況下では、傳統的な律典の表記の尊重が慣例となっており、依然として昔のやり方に従っているのは、やむにやまれないけれども賢明な選擇かもしれない。

二〇〇七年三月 南京 南京師範大學出版社
B 五判 一〇六四頁 一七〇元